或る時

谷崎潤一郎

一場

◆十代の頃に過ごした茅場町の家の回想。

◆私

日本橋区南茅場町、――今は たしか日本橋区に、いや中央区に南茅場町と云う町名は ない、大震災前迄あったその町は、震災後北島町亀島町などと云う附近の町を併合して出来た、ただの茅場町と云う町の一部になった。――その南茅場町に住んでいたのは、つからと云うことがはっきりしないが、多分 十一二歳の頃から十五六歳迄の数年間、明治三十年頃から三十五六年頃に至る期間であった。番地は 何丁目なしの二十五番地だったと思う。今の茅場町の交叉点から永代橋へ行く広い通り、あれは 震災後にあんなに広くなったので、私の住んでいた家の跡は 現在電車の走っている路面のどこかに当る筈である。当時は 今の大通りよりずっと狭かったのであるが、その頃としては やはり普通よりは広い通りであった。それを日本橋の方から来た右側の、霊岸橋の少し手前にお神楽堂の附いたお稲荷様があって、その角を曲る小さな路次があったが、それは永代橋の通りと並行の裏通りへ抜けるほんとうに細い細い道で、その左側に私の家は あったのである。私の家と云っても、蠣殻町で米の仲買店をしていた父が、相場で失敗して逼塞してからの住居だったから、もちろん借家なのだった。六畳の居間と、四畳半の女中部屋と、階下を造作して 八畳ほどの座敷に直した二階造りの土蔵と、部屋数から云えば たった三間しかない家、――――でも、今日の人は 三間の家と云うと、戦後のバラック建てとか簡易住宅などを想像しそうだけれども、

ああ云うものとは少し違う。兎に角土蔵が附いていたのだし、玄関なしの、いきなり六畳の居間になってはいたけれども、路次に面した潜りを開けると、飛石伝いに、片側が土蔵の腰巻、片側が板塀の奥まった通路が附いていて、その突当りに格子戸があり、三和土の土間があり、土間へ這入ると上り框に中硝子の障子が嵌まっていて、その中が六畳の居間であったし、ささやかながらも八つ手や南天の植わった庭があったし、庭から勝手口へ廻れるように板塀が囲らしてあったし、その時分にはよくそう云う路次に隠居所や妾宅などがあったものだから、その家も以前はそう云う種類の人が住んでいたのであろう。家族は両親と、私と、弟の精二と、三つぐらいになる妹のお園と、ばあやとの六人であった。ばあやはおみよと云う天保生れの老婆であったが、私の乳母に雇われたのが始まりで、私の次に精二の守りをし、当時は女中代りに台所の用をしていてくれた。六畳の間にお定まりの茶箪笥長火鉢があって、父と母とが火鉢を隔てて夫婦喧嘩の遺り取りをしたり小鍋立をしたりしていたのを、今も時々思い浮かべるが、夜は両親は蔵座敷に寝私と精二とが六畳に寝た。土蔵の観音開きのところは、普通なら四角な太い格子の、金網を張った引戸が篏まっているべきなのだが、そこは中が座敷に改造されていたので、やはり中硝子の障子になっていた。観音開きの前が庭に面した縁側で、縁側の先に厠があった。夜など、私は厠へ行く時に自然土蔵の前を通るので、中硝子を透して両親の閨を覗くと、まだ電燈が普及していない時分で、中にぼんやり行燈がともっており、奥の方に母、口もとの方に父が寝ていた。（お園が何処に寝ていたか覚えがないが、多分父の

布団と母の布団の間に、別に小さな布団を敷いて寝ていたのであろう）

母は元治元年の生れだったから、その頃が三十五六歳、父が五つ六つ上であった。私の家は母が家附、父が養子だったから、何かにつけて父は母に一目置き、殊に自分の失策で財産をなくしてからは、ゆとりのない中でもせいぜい母をいたわるようにしていたので、夜具布団なども母のは父のよりも上物の綿や絹布が使ってあったように思う。朝なども、父の方が先に起き、母は寝坊した。火を起して御飯を炊くのはばあやであったが、後にもっと貧乏してばあやも女中もいなくなってからは、父が炊いているのをしばしば見た。箱入娘で育った母は恐らく御飯の炊き方を知らなかったに違いない。

二場

◆ある朝。土蔵をのぞく私。
◆私

或る朝、私のいくつの時であったか、一年のうちの何月頃のことであったかも覚えていないが、多分七時前後の頃、私は小用が足したくなって寝床を出、縁側を通って厠に行ったが、帰りに土蔵の中を覗くと、もう行燈が消してあって、中硝子から庭の朝日がさし込んでいる蔵座敷の、奥の方まで薄明るくなっていた。と、母が四つ這いのような形でうつむいて、枕にこめかみをあてて、ちょうど縁側に立っている私の方へ顔を向けていた。庭の明りのさす方へ向けているわけなので、母の白い顔がよく見分けられた。その顔には苦痛の表情はなかったけれども、私は母が癪か何かを起していて、父が上から背中を押しているのだと思った。なぜなら母の顔の上に父の顔があって、二つが上下に重なり合っていたからであった。父の顔も同じように此方へ向いていたが、父がどんな風にして母を押えているかは、母の夜具の中へ父が這入って押えているので、よく分らなかった。父も母も、私が覗きながら土蔵の前を少しゆっくり通って行くのに心づき、たしかに私を見ていたけれども、何とも云いはしなかった。むしろ二つの顔は私を見ながらほのかに笑っているように思えた。

それは私がその家にいた十一二歳から十五六歳に至る間の、或る一日の朝の出来事なのである。父と母とが、私が覗いているのを知りつつ黙って許していたところをみると、その時の私はまだほんとうに子供だったに違いない。多分十五六歳よりは

十一二歳の方に近い時だったであろう。父と母のそう云うところを見たのは　後にも前にもその時一度きりであった。その時の父と母の顔に浮かんでいた薄笑いの意味がはっきり諒解出来たのは、それからまた十年ぐらいの後、二十歳を越してからであった。私にはあの時の両親の謎のような笑顔が長く焼き着けられていて、「あ、そうだったか」と、十年後の或る日忽然と気づいたのであった。私は　その時の笑顔を思い浮かべると、それを平気で覗いていた無邪気な自分の姿までが眼に見えて来る。そして私は生涯に一度でも、父と母とのそう云う光景を見た記憶のあることをたいへん有難く思うのである。父と母とは、全体から云って決して幸福な人達ではなかった。私が覚えてからの二人は、世渡りの苦労に悩まされつづけ、人生の辛酸を嘗めつくして、いつもいつも愚痴と泣言を云い暮していた。いつもいつも夫婦喧嘩の絶え間がなかった。すでに両親の齢を越している今の私は、晩年の両親の世路の艱難に打ちひしがれた姿を思うと涙なきを得ないのであるが、少年の時に見たあの光景の記憶は、幾分かでも　此の不孝の子の悲しみを和らげ、悔恨を軽くしてくれるのである。

（昭和廿七年三月稿）

Podcast ののラジオ　好評配信中！

視聴・購読はこちらから
https://gekidannono.com

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。
みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。
いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学　谷崎潤一郎　『或る時』Podcast 版

発行日　令和 7 年 7 月 26 日
著　者　谷崎潤一郎
編　集　劇団のの
発　行　劇団のの
https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com

※本文は、定本の原文を加工したものです。
　ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。
底　本　『谷崎潤一郎全集　第二十二巻』『底本タイトル』中央公論
初　出　昭和 27（1952）年